

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：34414

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13388

研究課題名（和文）中世高野山一心院における文芸生成に関する総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study on the Generation of Literary Arts in the Medieval Koyasan Isshin Temple

研究代表者

大坪 亮介 (Otsubo, Ryosuke)

大阪大谷大学・文学部・講師

研究者番号：10713117

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではまず、『太平記』諸本生成過程における真言関係の増補の様相、そして複雑な説話引用の手法を明らかにした。またこれと関連して、天正本『太平記』巻四「呉越戦争」の独自増補箇所には、主に禅林で享受された文献からの影響があることを想定した。さらに、従来『平家物語』との関連や、その教理といった面から関心を向けられてきた『高野物語』の本文を分析し、その歴史認識のあり方の特色を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

天正本『太平記』独自増補箇所の分析は、該本の生成を促した力の一端を知る手がかりとなり得るものである。加えて『太平記』に引かれる「問民苦使」説話の分析からは、『太平記』の巧妙な歴史叙述の方法を明らかにすることができた。

一方、本研究の主要テーマである一心院における文芸生成について、研究期間内では十分に解明し得なかったものの、『高野物語』独自の歴史認識の様相を示すことができた。これは高野山一心院と文芸生成についてさらなる考究を進めていく上での足がかりとなり得よう。

研究成果の概要（英文）：In this study, first, it was clarified that the articles related to Shingon were augmented and the narratives related to Truth were quoted in a complicated way in the process of generation of the Taiheiki books.

In connection with this, it was assumed that the original supplementary parts of the "Tensho-bon-Taiheiki" Vol. 4 "Goetsu-ikusa-no-koto" were influenced mainly by the literature read in Zenrin.

Furthermore, I analyzed the text of "Koya Monogatari," which has been attracting attention for its doctrine and its relation to "Heike Monogatari," and pointed out the characteristics of its historical recognition.

研究分野：日本文学

キーワード：日本文学 中世文学 太平記 高野山

1. 研究開始当初の背景

周知のように、日本古典文学の生成の場として、高野山は大きな位置を占めている。しかし、高野山上にあった一心院に関する研究は手薄である。しかし、申請者は、『太平記』諸本の中でも特異な本文を持つ丙類本(以下天正本に代表させる)巻二「俊基朝臣誅戮の事」の独自増補を取り上げ、その増補と一心院との関連を想定した。ここで新たな疑問として浮上してくるのが、天正本の他の増補箇所でも一心院周辺との関連が窺えるのかという点である。改めて天正本全体を見渡した検討が必要であろう。

天正本の成立については、従来、佐々木氏の周辺、二条良基周辺、禅的環境との関連が想定されている。さらに本研究の考察により、他にも一心院と関わる独自増補箇所を指摘できるならば、天正本の有力な成立圏として、新たに一心院の存在を付け加えることができよう。このように、一心院に着眼する本研究は、天正本の成立基盤解明に大きく寄与することが期待される。また、天正本は室町中期頃に成立したとの見方が有力である。とすれば、一心院と天正本との関係は、中世の『太平記』享受や本文改編の現場を把握する上でも有益と思われる。さらに一心院に注目すべき理由として、一心院と関わる中世の文芸作品が『太平記』以外にも存在する点を挙げておきたい。特に親王院本『高野物語』と西大寺本『妻鏡』は、一心院僧の弟子頼円が観勝寺で書写した作品と考えられる。その観勝寺において、一心院と深く関わる僧が両書を書写していた事実を鑑みるならば、一心院の存在は、単に『太平記』の一伝本のみならず、中世文学研究の広い範囲にわたって、有益な知見を提供することが期待されるのではないかと。申請者は以上の見通しに基づき、本研究を着想した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、高野山一心院が中世文学の生成において果たした役割を解明することである。日本古典文学の生成と寺院圏との関わりについては、多くの先行研究がある。しかし、本研究で注目する一心院は、仏教史学の分野においてさえ、専論すらほとんどなかった。ところが、申請者は、『太平記』の重要伝本(天正本)の一章段の成立に一心院が関わっている可能性を提示した。これを承け、本研究では、テーマ1「天正本『太平記』の世界と一心院」、さらにテーマ2「頼円と一心院をめぐる文芸」という二つの視角を設け、中世の一心院における文芸生成の実態およびその影響を明らかにする。上記の作業により、従来注目されてこなかった一心院という場が、中世文学の生成について考える上で重要な知見を提供することを示したい。

3. 研究の方法

まず、本研究を着想するきっかけとなった『太平記』に焦点を置いた分析を行った。従来、『太平記』は天台との関わりが深く、真言との関係は薄いと考えられてきた。そのため、真言関係の文献の利用法については、十分な検討が行われてこなかった嫌いがある。しかし、本研究では、作中の真言関係記事を精査し、その注釈的な読解を通して、その典拠およびその利用法の解明を試みた。

続いて、『太平記』以外の文献を対象とした分析を行った。当初は長期休暇を利用して必要な資料の調査に赴く予定であったが、本研究期間は単著の刊行準備と重なったこともあり、十分な時間を取ることは叶わなかった。そこで、購入・取り寄せ可能な資料により遂行可能な研究にシフトし、さらに対象とする作品も『高野物語』に絞ることとした。該書は三宝院本と親王院本の二種が知られているが、親王院本奥書によれば、親王院本は頼円なる僧が一心院阿覚上人自筆本を観勝寺で書写したものだということ。こうした伝来ゆえ、本研究の目的である一心院における文芸の様相を探るには、該書を分析対象とすることが最も効果的であると考えられるからである。

具体的な研究手法としては、『高野物語』の大きな特徴である物語の聞き手の人物設定に注目、さらにその他の箇所と同時代文献との比較を行うことによって、他書とは異なる『高野物語』の歴史認識の特色を浮き彫りにしようと試みた。

4. 研究成果

本研究では、(1)～(4)まで四つの視角からの考察を行った。(1)～(3)は上記「研究の目的」のテーマ1「天正本『太平記』の世界と一心院」に関わるものであり、(4)はテーマ2「頼円と一心院をめぐる文芸」に関わるものである。その成果を以下具体的に記す。

(1)天正本『太平記』における真言関係の増補

天正本『太平記』巻二「俊基朝臣誅戮事」の独自増補箇所の背景として、高野山一心院およびその仁和寺の存在が指摘できる(大坪亮介「『太平記』と仁和寺」、2015年)。本研究課題は、このことを端緒として構想された。

本研究期間ではまず、「俊基朝臣誅戮事」の増補をより詳細に検討するところから始めた。すなわち、天正本独自箇所では、登場人物が一心院に「閉籠」ったとされている。一心院僧の記述を多く含む血脈からは、多くの僧が一心院に遁世していたことが確認でき、天正本の増補は、こうした実際の一心院の宗教的環境とも符合していると考えられる。

加えて、天正本では登場人物の尼の信仰生活が詳述されており、そこからは阿弥陀信仰の要素が濃厚に窺える。実は一心院は阿弥陀信仰が盛んであったと推測され、先ほどの記述と同様、尼の生活に関する増補もまた、一心院の実情に即したものと解される。

さらに天正本全体を見渡してみると、巻二「俊基朝臣誅戮事」以外にも真言に関わる独自増補が複数窺えることが判明した。まず巻二「主上御出奔師賢卿天子号事」には、後醍醐が鎌倉幕府の探索を逃れるため、東大寺東南院の聖尋を頼る場面がある。天正本は、聖尋が三宝院流の正流であったことなど、聖尋の功績を詳述している。この増補が事実に基づくことは、同時代の記録類などからも裏付けることができる。天正本は、東大寺僧でありながら真言にも通じた聖尋について、正確な情報を増補していることが分かった。

加えて、天正本巻三十八「北野通夜物語」にも興味深い増補が見られる。「北野通夜物語」とは、文字通り北野社の通夜の場において、遁世者・雲客・法師が政道批判を行う箇所である。天正本やこれを承けたと見られる諸本では、日僧正頼意なる僧が鼎談の聞き手となり、最後は平和への希望を抱くという構成になっている。この頼意に関する伝記的事実を掘り起こしていくと、彼が後醍醐の側近く仕えた真言僧であったことが知られる。頼意は後醍醐死後も南朝の宗教界の柱石として活躍しており、東寺長者として実際に天下の平和を祈っていたことを示す史料も存在する。これらよりすれば、天正本「北野通夜物語」の頼意像は、こうした頼意の実像を反映していると捉えることが可能である。

以上のような真言に関する天正本の増補には、さらなる共通点がある。それは、一心院・聖尋・頼意は、後醍醐や南朝周辺の真言僧・真言寺院として浅からぬ関係を有していたことである。天正本は、こうした要素に特段の関心を寄せ、物語の展開とは関わらない箇所であってもあえて正確な情報を付加していたことが浮かび上がってきた。ここからは、天正本の関心のあり方や、増補環境の一端を窺い知ることができよう。またこのことは、『太平記』の諸本生成を促した力について考える上でも有益な手がかりになるものと考えられる。

(2) 『太平記』における『高野大師行状図画』利用

(1)に引き続き『太平記』における真言関係記事についての考察を行ったところ、巻三十五のいわゆる「北野通夜物語」で語られる説話のうち、問民苦使に関する説話の典拠を指摘することができた。問民苦使は平安時代に諸国を監察するために派遣された使節であり、歴史史料はともかく、文学作品において言及されることはあまりない。しかし、『太平記』諸本のなかには、この問民苦使に関する説話を増補したのものがある。従来の注釈書類では、この説話にちりばめられた漢籍由来の表現に関する言及はあったものの、説話そのものの典拠については指摘されてこなかった。しかし、実はこの箇所は、弘法大師伝の一つである『高野大師行状図画』のうち、幼い頃の空海が問民苦使に見いだされる箇所とほぼ同文関係にあり、『太平記』は『高野大師行状図画』に依拠していると考えられる。

中世数多く制作された弘法大師伝の類を見渡してみると、空海と問民苦使との邂逅を記したものは多い。しかしながら、『高野大師行状図画』のように、問民苦使の職責について漢籍の表現を駆使して詳述するものは見いだしがたい。そもそも、弘法大師伝では問民苦使の職責をくたくたく語る必要はないはずである。しかし、『高野大師行状図画』は問民苦使に対して突出した関心を寄せており、『太平記』もそうした関心を引き継ぎ、問民苦使の説話を取りこんだと考えられるのである。『高野大師行状図画』が『太平記』巻十二「神泉苑事」の増補に利用されていることは既に指摘されていたが、本研究によって、それ以外の箇所にも該書が利用されていることが明らかになった。

しかも、同じ『高野大師行状図画』を引く巻十二「神泉苑事」と比べて、「北野通夜物語」の文献利用の方法は大きく異なる。すなわち、『太平記』諸本の中には、巻十二「神泉苑事」で語られる空海と守敏の法力くらべの場面に『高野大師行状図画』を撮取したものが見受けられる。「神泉苑事」では、空海の事跡を語る箇所で弘法大師伝の一つである『高野大師行状図画』が利用されている。これに対して、「北野通夜物語」では、弘法大師伝とは全く関係のない文脈で『高野大師行状図画』が引かれているのである。

さらに問民苦使説話の典拠の解明からは、当該話に続けて語られる説話との連関までが浮かび上がってくる。すなわち、問民苦使説話を有する『太平記』諸本は、原則としてこれに続けて『北野天神縁起』に由来する醍醐天皇墮地獄説話を布置している。醍醐天皇墮地獄説話は巻十二「神泉苑事」でも語られるが、そこでは空海が大内裏の扁額を書いたという説話に接続している。森田貴之氏によれば、「神泉苑事」におけるこうした説話配列の背後には、『北野天神縁起』に見られる空海と北野天神との説話的つながりがあるという（『太平記』と弘法大師説話、2015年）。こうした空海と北野天神とのつながりを踏まえて「北野通夜物語」の問民苦使説話と醍醐天皇墮地獄説話を子細に検討すると、それぞれ『高野大師行状図画』と『北野天神縁起』を典拠とする説話が連続して語られているということに気付く。説話の典拠に注目してみたとき、先に見た巻十二の例と同様、ここでも空海・北野天神という連関によって二つの説話が結びつけられていることが明らかとなるのである。

このように、『高野大師行状図画』という新たな典拠の存在を視野に入れることによって、問民苦使記事と醍醐天皇墮地獄譚との説話連関が浮かび上がってくる。『太平記』が説話を引用する際に用いた複雑な手法を示す事例に数えられよう。

以上、本研究では『太平記』において真言関係の文献が真言の文脈とは関わりない箇所でも利用されていることが明らかとなった。これは、『太平記』と真言とのつながりを示す新たな要素として注目される。遺憾ながら、本研究期間内で予定していた、天正本と高野山一心院との深い関わりを具体的に提示するところまでは叶わなかった。しかし、結果として『太平記』における多様な歴史叙述の手法を浮き彫りにすることにつながったといえよう。

(3) 天正本『太平記』巻四「呉越戦事」の増補

研究計画立案当初は予期していなかったが、計画に従い天正本の増補箇所に注目した研究を進めていくなかで、天正本巻四「呉越戦事」の独自増補記事の生成基盤に関して新たな知見を得ることができた。「呉越戦事」では、文字通り古代中国の呉越合戦の顛末が長文で語られる。『太平記』巻四は本文異同の多い箇所として知られているが、呉越合戦の記事も例外ではない。とりわけ天正本では、呉王夫差の築いた姑蘇台・姑蘇城に関する記述が大幅に増加している点が注目される。しかも、それらの増補からは、姑蘇台・姑蘇城を呉王夫差と寵妃西施の歓楽に結びつけて描く傾向が看取されるのである。加えて天正本では、姑蘇台が西施との歓楽のために造営されたという、他本には見られない要素が見られる。

『太平記』以外の文献を概観してみると、意外にも天正本と同様の傾向を持つものは見出しがたい。例えば、『太平記』当該箇所と近い関係にある『史記』・『呉越春秋』・『伍子胥変文』も、姑蘇城・姑蘇台と西施とをことさらに関連づけようとはしていない。また、呉越合戦の話題は日本の説話集や軍記物語、類書等でも多く取り上げられているものの、そのほとんどは、西施が絶世の美女であることや、姑蘇台の炎上に焦点を置いたものである。

そうした中であって、『和漢朗詠集』注釈の一つで、平安後期成立の『和漢朗詠註抄』には、簡潔ではあるが天正本に近い理解が示されている。また、晩唐の詩人胡曾の『胡曾詠史詩』の注釈のなかにも、『和漢朗詠註抄』とほぼ同文の記載が見られる。残念ながら、両者と天正本との関係をたどることは難しい。しかし、天正本の成立下限（十五世紀末）までに日本に将来された中国の文献のなかに、これらとほぼ同文の記述を持つものが複数存在している。それが、『新編事文類聚』続集・『方輿勝覽』・『韻府群玉』である。それぞれ、類書・地誌・韻書とジャンルは異なるものの、中世日本ではもっぱら禅林で享受された文献であるという共通点を持つ。興味深いことに、先行研究では、天正本の呉越合戦記事に見られる独自詩句と禅林との関わりが指摘されている（「天正本『太平記』増補方法小考」、2009年）。この点も考慮するならば、天正本独自の増補傾向の背後には、こうした禅の世界で享受された文献からの影響が想定されるであろう。

天正本の呉越合戦説話と禅林との交渉を探る先行研究としては、漢詩句の典拠に注目した前掲森田貴之氏の論考が既に存在する。その意味では、本研究(3)で指摘し得たことは、先行研究の範疇を出ないかもしれない。とはいえ、禅僧の間で享受された文献との関わりが、一漢詩句だけでなく「呉越戦事」全体にわたる増補傾向からも指摘できた点は大きな収穫であった。天正本独自の作品世界と成立圏との交渉を考える上で一つの手がかりになる可能性も秘めていよう。

以上、本研究(3)では、天正本で描かれる姑蘇城・姑蘇台の分析から、その増補傾向と生成基盤との関わりを想定した。本来のテーマである高野山一心院とは直接関係のない成果ではあるが、天正本が姑蘇城・姑蘇台に独自の関心を寄せていることは、本研究計画を着想するきっかけとなった、該本独自の歴史認識とも今後関わってくる可能性がある。というのも、姑蘇台に関しては、巻二十六の天正本独自章段「御即位事」にも注目すべき箇所が見られるからである。そこでは北朝崇光天皇の即位式の様子が、まるで秦の阿房宮や呉の姑蘇台のようであったと語られている。即位式には相応しくない不吉な比喻といえよう。しかし、天正本が南朝を正統とする独自の歴史認識を示すことよりすれば、ここで姑蘇台を持ち出す天正本の意図は明らかであろう。本研究で指摘した姑蘇城・姑蘇台への関心が該本独自の歴史認識ともつながりを持ち得るか、さらに見極めていく余地が残されている。

一方、天正本巻二・巻三十八の増補箇所では、後醍醐天皇周辺の真言僧・真言寺院に関する詳細な情報が付け加えられており、これが該本独自の歴史認識や皇統観とも結びついている可能性がある（大坪亮介「天正本太平記の増補」、2017年）。もし巻二十六「御即位事」の姑蘇台に関する独自箇所が、本稿で指摘した禅林で享受された文献とも関わりを持つのであれば、該本の歴史観・皇統観については、真言のみならず禅も視野に入れた考察が必要となってくるように思われる。この点については、研究期間終了後も引き続き検討していきたい。

(4) 『高野物語』の歴史認識と作者説

本課題の研究計画に従い、天正本『太平記』に続いて『高野物語』を分析対象とした。これは全五巻から成る文献で、巻一と巻二では、念仏・天台・禅の僧が自宗の優位性を主張した後、最後に登場した真言の老僧が真言の優位性を論証する。以降はこの老僧と少童の対話のみとなり、巻三前半では三力を兼ね備えた真言の教義が説かれ、後半では真言の教えが神明に裏付けられたものであることが明かされる。そして巻四と巻五では、空海の伝記とそれに関連した言説が語られる。伝本は三宝院本と親王院本の二種が知られており、親王院本奥書には、頼円なる僧が阿覚上人（融濟）自筆本を写したことが記されている。阿覚上人とは一心院に住していた僧であり

(『親王院本西院流血脈』) 本研究テーマを遂行する上で、該書の分析は不可欠といえよう。

本研究ではまず、『高野物語』の聞き手とされる「予」の人物設定と発言に注目した。「予」は清和源氏の武士であったが、承久の乱に際して官軍の敗北を予見して遁世したとされる。さらに「予」の言葉からは、『高野物語』が三種の神器の有無と百王思想という観点から後鳥羽院の敗北を説明していることが知られる。『六代勝記事』といった同時代の歴史叙述を見渡すと、後鳥羽は「悪王」ゆえ幕府軍に敗北したとされることが多い。『高野物語』のような歴史認識はむしろ特異である。加えて巻四の記述からは、『高野物語』の後鳥羽批判の焦点が、小野流にとって重要な地である神泉苑を蔑ろにしたという点にあったことが知られる。

これと対応するかたちで、『高野物語』は北条泰時に対しても他書とは一線を画した理解を示している。すなわち、『高野物語』では、泰時が小野流と深く関わる神泉苑・曼荼羅寺を復興したことを挙げてその政道を称揚している。泰時は同時代文献でも高い評価を受けることの多い人物ではあるが、『高野物語』のように、神泉苑・曼荼羅寺復興と関連付けて泰時の政道に言及する例は見いだしがたい。これもまた、該書の歴史認識の大きな特色であるといえよう。

加えて、『高野物語』では、泰時と並んで醍醐天皇の政治も称賛されている。しかし、その称賛のあり方もやはり他書とは異なっており、『高野物語』は醍醐が勧修寺を尊崇し、醍醐寺を建立したことを特に評価している。いずれも真言小野流にとって重要な位置を占めてきた寺院であり、『高野物語』は、北条泰時の場合と同様、醍醐天皇についても、その善政と小野流の保護とを結びつけていることが知られる。

以上からは、『高野物語』作者の立場が明確に窺えると同時に、北条泰時と醍醐天皇を並列させる意識も看取されよう。興味深いことに、こうした意識は、十三世紀末の『御成敗式目注釈書』である『関東御式目』にも窺うことができる。残念ながら、『高野物語』と該書との直接的な関わりは不明である。しかし、ここで想起されるのが、『高野物語』の作者が道宝と推測されていることである。というのも、道宝は関東と関わりの深い九条家の出身であり、自身も鎌倉で授法を行った形跡が見られるなど、関東と深いゆかりを有していたからである。『高野物語』が『関東御式目』に見られるのと同様の認識を持つという事実は、道宝作者説を補強する一つの材料となり得よう。

このことと関連して注目されるのは、『高野物語』が真言の優位を説く箇所において、三浦氏について特に詳述している点である。実は道宝の出身である九条家は、三浦氏との密接な関係が指摘されている。すなわち、源実朝が暗殺され、源氏将軍の血筋が途絶えた際、九条道家の子頼経を迎えるよう進言したのが三浦義村であった。義村は子の泰村とともに頼経の側近として権勢を誇り、承久の乱後は京都の公家社会にも大きな影響力を持っていたという(高橋秀樹『三浦一族の中世』2015年等)。このように、三浦氏と九条家とは深い縁で結ばれており、『高野物語』が三浦氏に強い関心を示していることと、該書の作者を九条家出身の道宝とする説とは全く矛盾しない。それどころか、道宝を『高野物語』作者と考えることで、はじめて該書が三浦氏を特筆することの意味は理解されるであろう。

従来の研究では、『高野物語』は主にその教理や『平家物語』との関わりについて言及されることが多かった。しかし、本研究では、該書の記述内容の分析からその歴史認識の特色と作者説の関わりを示すことができた。こうした特徴を持つ文献に一心院僧自筆のものがある(親王院本奥書)という点よりすれば、該書のさらなる分析は、本研究課題が目指していた一心院における文芸生成の実態を考える上で有効な方法であると考えられる。

以上、本研究では(1)~(4)の観点から研究を進め、ある程度の成果を得ることができた。(3)のような予想外の収穫があった一方で、「研究の方法」の項目でも述べたように、実地の文献調査や西大寺本『妻鏡』・『壺囊鈔』の分析は充分行うことができなかった。また、本研究課題を着想した段階では、観勝寺で西大寺本『妻鏡』を書写した頼円と、一心院僧自筆の親王院本『高野物語』を書写した頼円とが同一人物であり、頼円の存在を手がかりとして一心院における文芸生成の実態を探れるものと予想していた。ところが、文献による調査を進めていくに従い、両者を同定することは難しいと判断するに至った。頼円については、高野山大学図書館にて『頼円師記』なる文献調査を行ったものの、この頼円が一心院と関わる人物であるとの材料を見いだすことも現時点ではできていない。

このように、当初の計画通りに研究を遂行できなかった点はあるが、『太平記』諸本生成の過程において真言・禅に関わる要素が付加されていった様相を実証的に明らかにし得たこと、そして『高野物語』独自の歴史認識のあり方を解明できたことが、本研究期間での主な収穫であったといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大坪亮介	4. 巻 50
2. 論文標題 『高野物語』の歴史認識と作者説 北条泰時と醍醐天皇を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪大谷国文	6. 最初と最後の頁 70-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大坪亮介	4. 巻 -
2. 論文標題 『太平記』引用説話の典拠と文脈－英訳『太平記』の注記を端緒として－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 2018年度「文学研究科プロジェクト」成果報告書	6. 最初と最後の頁 32-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大坪亮介	4. 巻 58
2. 論文標題 天正本『太平記』巻四「呉越戦事」の増補傾向 姑蘇城・姑蘇台の記述を端緒として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文学史研究	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大坪亮介	4. 巻 5
2. 論文標題 天正本『太平記』の増補 真言関係記事を例に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 軍記物語の窓	6. 最初と最後の頁 153-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大坪亮介
2. 発表標題 『太平記』引用説話の典拠と文脈
3. 学会等名 大阪市立大学都市文化研究センター「研究科プロジェクト」第3回研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----